

## II-6. MACOB-MECP 療法が奏功した Non-Hodgkin's lymphoma の1例

田中知明, 櫻田正也, 増田真一  
 小山秀彦, 長門義宣, 仲野俊彦  
 金子良一, 笠貫順二, 伊藤文憲  
 大野孝則 (船橋中央)  
 大久保春男 (同・病理)  
 深沢元晴, 中村博敏 (千大)  
 三方淳男 (同・一病理)

症例67歳男性。全身リンパ節腫脹を主訴に入院精査。non-Hodgkin lymphoma diffuse small cleaved stage IIIb の診断にて H 6.5月より MACOB-MECP 療法を施行し完全寛解を得る。放射線療法を追加し寛解継続中である。中高度悪性群の non-Hodgkin lymphoma に対する化学療法レジメンは未だ一定の見解を得ていないが、多剤併用療法が奏功した症例を経験し報告する。

## II-7. 血清 IL-5 高値で好酸球増多を伴い、巨大縦隔腫瘍を認めたB細胞性リンパ腫

中世古知昭, 熊谷匡也, 後藤茂正  
 酒井 力, 高木敏之  
 (県がんセンター血液化学療法科)  
 若月 進 (同・臨床病理)  
 三方淳男 (千大・一病理)

症例は44歳男性。主訴は発熱、頸部リンパ節腫脹。巨大縦隔腫瘍、左側胸水を認めた。入院時 WBC ; 19,700 mm<sup>3</sup>, Eos 55%, LDH ; 468IU/l, 血清 IL-5 ; 89.2 pg/ml と高値。リンパ節遺伝子解析では IG (H) JH 再構成陽性、免疫染色では細胞質に IL-5 陽性。Anaplastic large cell lymphoma (B cell type, CS2B) と診断し、化学療法により完全寛解を得、末梢血幹細胞移植を行なった。本症例はB細胞系腫瘍細胞の IL-5 産生が好酸球増多の原因と考えられた。

## II-8. 当院における同種骨髄移植9例の検討

清宮晃一, 和泉秀彰, 中村 貢  
 小関秀担, 三上恵只 (千葉市立)  
 橋本真一郎 (千大)  
 浅井隆善 (同・輸血部)

当院において昭和63年3月より平成6年11月までの約7年間に施行した同種骨髄移植9例について検討した。

9例中7例はハイリスク症例であったが、生存率については良好な成績が得られたと考えられた。また、9例中に再移植3例が含まれており、うち2例は長期生存が期待できると思われた。症例選択については、照射施設がないこと、および診療科目の制限より、慎重に行う必要があると思われた。

## II-9. 当院における潰瘍性大腸炎増悪因子の検討

平野憲朗, 三村正裕, 黒澤孝光  
 崔 世浩, 田口忠男, 石原運雄  
 (千葉労災)

当院で経験した UC 70症例の増悪因子について検討した結果、男性では社会的ストレスと飲酒が多く、女性では家庭内ストレスと妊娠出産が多いという特徴を認め、増悪因子として注目すべき症例を3例呈示した。今回の検討により、各年齢層、性別により特徴的な発症、増悪因子が存在し、受験、就職等完全には回避しえないものも存在するが、UC の長期管理の上で患者への指導が重篤化への未然防止につながると思われた。

## II-10. 貧血を主訴とした小腸腫瘍の2例

和泉秀彰, 清宮晃一, 中村 貢  
 小関秀旭, 三上恵只 (千葉市立)  
 橋川征夫 (同・外科)

今回、我々は貧血をくり返した二例の小腸腫瘍を経験した。小腸腫瘍の診断には血管造影が有用であった。大量出血を来した一例に対しては、Vasopressin 動注が一時的止血に有効であった。

原因不明の貧血で、消化管出血が疑われる場合は、小腸腫瘍も念頭に置いて検査を進める必要があると思われる。

## II-11. 当院における大腸結節集簇様病変の臨床的検討

増田真一, 櫻田正也, 田中知明  
 小山秀彦, 長門義宣, 仲野敏彦  
 金子良一, 笠貫順二, 伊藤文憲  
 野口武英, 大野孝則 (船橋中央)  
 大久保春男 (同・病理)

当院にて経験した大腸結節集簇様病変10症例について臨床的検討を加えた。平均年齢は66.5歳で、性別は男性に多かった。大きさは7~40mm の範囲に分布し、20mm 以下の病変は注腸X線検査での描出は困難であった。注腸X線検査を受けた者の0.24%、大腸内視鏡検査